



(平成 26 年度総会・シンポジウム 2014.5.24)

テーマ “熊山遺跡の考察”

パネリスト 岡野進副会長・佐藤光範理事・横山修尚理事 司会 出宮徳尚会長

熊山石積遺跡(国指定)の築造に関わった勢力者について、3人の方々のそれぞれ独自の観点からの発表が行われました。

岡野副会長は石積遺跡築造年代の奈良時代後半をもとに、古代から熊山の北、吉井川周辺に勢力基盤を持っていた豪族和気氏一族と、奈良、平安時代に都の高級官僚として活躍した和気氏出身の和気清麻呂とのかかわりを推察されました。

また佐藤理事は吉備のハタ氏のヒンドゥー教の影響がある宗教活動、及び遺跡に注目し、熊山石積遺跡から出土した陶製筒型容器の形体をヒンドゥー教シヴァ神の象徴としてとらえ、吉備のハタ氏と熊山石積遺跡との関連を示唆されました。

そして横山理事は熊山の帝釈山霊山寺が鑑真和上創建の伝承がある事に注目し、鑑真と共に、753年に中国から渡来したイラン系ソグド人の安如宝の日本での宗教活動の影響下の元、熊山石積遺跡が築造されたのではないかと考察されました。

(佐藤理事)

私は熊山の石積みは吉備のハタ氏が築造したと思っています。そして石積みの中に入っていた写真の陶器はヒンドゥー教のシヴァ神（リング）（男根）だと思っています。

弥生時代に日本列島に海を渡って各地から色々の民族がやって来ました。と同時に宗教も「拝火教」「道教」「儒教」「ヒンドゥー教」等が伝播して来ました。原則多神教ですから、吉備のハタ氏の中でも色々です。その中、吉備のハタ氏が熊山に残した「ヒンドゥー教」の流れを追っかけてみました。



円形筒型容器



陣屋遺跡



淀江麦晩田の四隅突出型墳丘墓

吉備のハタ氏のヒンドゥー教の始まりは、弥生時代の吉備（備後）に遡ります。ご案内の様に、日本海側には弥生時代の支配者のお墓「四隅突出型墳丘墓」がありますが、その最初の四隅突出型墳丘墓は、吉備（備後）の三次市の山の中の「陣屋遺跡」です。時代が下がると、四隅突出型墳丘墓は淀江麦晩田の四隅突出型墳丘墓の形になります。四角なお墓の四隅が飛び出ている形です。最初の頃の、四隅突出型墳丘墓の四隅を拡大して見ると、突出部は青木4号墳の形です。

先般、インドネシアに行ってヒンドゥー教の遺跡を見てきました。寺院には写真のように亀や男根などの形をした石造物を見る事が出来ます。青木の4号墳の四隅突出型墳丘墓の突出部と似ていませんか。だから私は四隅突出型墳丘墓とは云わず、四隅挿入型墳丘墓だと思っています。このように吉備のハタ氏は弥生時代から備後でヒンドゥー教に係わっていたのです。その後の吉備のヒンドゥー教の名残を追ってみます。



青木4号墳

ヒンドゥー教の寺院は、東から西に向かってお参りします。日畑（ヒ・ハタ）の日畑廃寺は南門からお参りするのではなく東門からお参りする。穿った見方をすれば、熊山の石積みも山上平たん部の西の端に築造しています。

日畑（ヒ・ハタ）と云えば今でも部落で「楯築墳丘墓葺き石を持ち帰るとお腹が痛くなる」と云って楯築墳丘墓を守っている。楯築墳丘墓（当時の日本一のお墓）はヒ・ハタのハタ氏が築造し、その子孫が護っている。

写真のヒンドゥー教の寺院は、亀が護っています。楯築墳丘墓の中心には「亀石」と呼ぶ、一見、亀に似た石がある。あの亀石が楯築墳丘墓の被葬者を護っているのです。現代でも、旧山手村では、池の中に水の神様・弁財天（サラスバティー）を祀りますが、島が亀の形をしています。



亀が守るヒンズー教寺院



弁財天を祀る亀形の島



鶴山丸山古墳の石棺の縄掛け突起

また、関係があると思われる熊山南の鶴山丸山古墳から出たと云われる三角縁神獣鏡はハタ氏関係の古墳から出土しているから、被葬者の名は判らないがハタ氏の古墳だ。その石棺の縄掛け突起は、亀の頭に似ている。

石積み遺跡の近くにあったお寺は「帝釈山霊仙寺」と云う。ヒンドゥー教の帝釈天（ヒンドゥー教のインドラ神）から山号を貰っている。

そして熊山南麓に「伊部」がある。字は違うが「忌部」の先祖は「天太玉命」で徳島に降臨されているが、徳島でもハタ氏と共生している。だから熊山はハタ氏が関係していた山です。

(横山理事)

私は30年ぐらい前、中国揚州の大明寺に行ったことがあります。大明寺には、鑑真和上坐像が安置されており、2006年、仏法と語学を学ぶための鑑真学院が、境内に開校したそうです。

鑑真は759年東大寺唐禅院に賜った備前国の水田、百町を経営の基礎として、奈良の唐招提寺を創立した。この唐招提寺の末寺として、熊山の帝釈山霊山寺も鑑真の創建と思われます。この霊山寺の境内に、熊山石積遺跡はつくられたようです。

鑑真の随行の弟子で唐招提寺第四代和上となった安如宝は、ソグド人であった。この安如宝の故郷のソグディアナ（現在のタジキスタン共和国）のヴァン仏教遺跡は、熊山遺跡とそっくりです。詳しくは丸谷憲二先生の論文をお読みください。

安如宝は、律・天台の碩学であったばかりではなく、一種の呪験者として評価されていたとゆうことである。僧侶の呪術的祈祷によって現世利益が引き出され、この現世利益の中でも重要なのは病気の治療である。日本後紀にゆう安如宝の呪願が、彼もまた呪者として名を馳せていたことでしょう。

奈良時代には、呪術の力を求めて山に入った仏教は、「清浄＝悟」の論理を固めていったのではないか。

当時の山林修行は1年の半分は各々の所属の寺で学業に励み、残りの半分以上を山林修行で



熊山頂上石積遺跡



ソグディアナのヴァン仏教遺跡

山林で起居し、近くには食事のできる寺などがあつたようです。

このような熊山石積遺跡が築成され、唐招提寺の山林修行の場として熊山一山が信仰道場となつていたのでないか。

唐招提寺金堂内の仏像の配列は、中央に盧舎那仏（後の大日如来）、東方薬師如来・西方千手観音（顕教では阿弥陀如来）、四隅に四天王を置き、その空隙を梵天・帝釈でうずめる。これは密教的立体マンダラを現出させている。

唐招提寺の伽藍造営に自己の生涯をかけて実現させた人は、先師鑑真の後を継いだ如宝以外には考えられない。

安如宝は空海と生涯にわたって親交があり、空海が受戒の時の師を勤めている。空海は鑑真の開いた東大寺戒壇で受戒している。

空海は安如宝から鑑真和上の渡海弘法の使命感や「四分律」遵守について詳しく聞いたであろう。さらには、訪中前にソグド語やペルシャ語、あるいはゾロアスター教やマニ教、景教など中国に集まっているアジアの異国語や異教について聞き入ったと思われる。

また中国から密教をたずさえて帰り、平安仏教の大立物となっている空海を通して朝廷に働きかけた安如宝は、812年再び唐招提寺に封戸五十戸を獲得した。このお礼の表を、空海が安如宝に代わって起草しており、封戸施入にも、空海が関与していたと思われます。

寺院に与える特権として、何戸かの家その寺院の封戸に指定し、そこから納められる租税の一部（場合によっては全部）を封戸の持ち主に与える制度を封戸といいます。この封戸が776年と779年に計150戸が唐招提寺に与えられたほか、776年播磨国の食封50戸が施入れに、さらに776年備前国津高郡津高郷で三段三十二歩の畠を購入しており、翌777年には備前国に十三町歩の寺領を与える太政官符が下った。備前国での寺領獲得運動も進み、さらに進んで朝廷に近づき、唐招提寺を官寺化することにも成功していた。

このように唐招提寺での教学の研鑽とともに、如宝は呪術者としての力を求めて熊山に入山し、山の中に住んで山林での修行に励んだのではないかと。

当時、山林修行については規制があり、僧尼令では山林に居を構えるのは可、山林を移動しながらの修行は不可とされていた。

安如宝は鑑真に最後に随行した胡国人如宝で、一行が訪日したのは753年です。755年には、安史の乱が起こり、756年ソグド系突厥の安祿山がクーデターに成功し、しかし762年唐の要請でウイグルが援軍を送り、洛陽を奪い返し、763年に鎮圧されると、中国の紅毛碧眼で鼻の高いひげもじゃのソグド人は見つけ次第殺されて、7000人ほどのソグド人が殺されたそうです。

安如宝は中国に帰りたくても帰れず、故郷のソグディアナは8世紀中頃からイスラムの侵略を受け、日本に永住する決意で、ソグディアナの故郷にたくさんあるヴァン仏教遺跡を熊山に望郷の表現として再現して、熊山石積遺跡をつくったのではないかと。

陶製筒型容器が一種のリングならば、それは宝器である。

陶製の筒型容器が、四つの入り口をもつ内部の十字形が交差した中央に位置する専用の堅穴に納められていた、リング的なものであったと思われる。土着的なリング崇拝が仏教化したのではないかと。

熊山の遺跡は中段の仏龕に四方仏を配して四方四仏として四天王を密教的に配置したものではないかと。

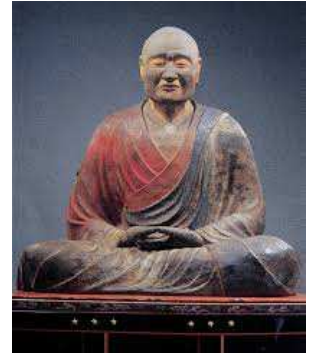
また和気清麻呂について、「吉備の古代王国」（鳥越憲三郎著）によると、和気氏の先祖（四代）は、大庭郡（後の真庭郡）大庭郷の名門の出身で分家筋にあたるようです。和気一族は所領として備前国藤野郡を授かったので、和気町で先祖供養の寺院を建立したようです。したがって私は和気氏は美作より南下して東備で栄えたという説です。

ソグド人安如宝の出身地ソグディアナ（現在のタジキスタン共和国）のヴァン仏教遺跡こそ、熊山石積遺跡のもととなった遺跡ではないかと思われます。是非一度タジキスタン共和国のヴァン仏教遺跡に行ってみたいものです。

（岡野副会長）

私達の故郷吉原地区の南には霊峰熊山がそびえる。古代から、信仰、聖地の山として栄え、千古の歴史がある。確かな年代は判らないが、4世紀頃、吉備の國が栄えていた時代に熊山は吉備國の隅にあるところから、隅山と呼ばれていたと云う言い伝えもある。

その頃、和気氏初代の一族が、現在の赤磐市吉原地区にいて、この辺りを流れる吉井川周辺を中心に勢力基盤を拡大した地方豪族であると



鑑真和上坐像（唐招提寺）



和気氏邸宅跡から吉井川越えに見た遺跡群

云われている続日本記の記録に和気氏姓の元は磐梨別公(いわなすわけノきみ)とあり、磐(いわ)製鉄に関連した氏姓であるとも推測される。この地域で和気一族は銅、鉄の精錬、吉井川の豊富な砂鉄での製鉄、鍛冶など高度な技術を使って、活発な活動を行っていたと思われる。吉井川流域 10Km の間の 10ヶ所～益原、田上上、田上下、大田原、原上、原下、奥吉原、吉原、河田原、多々原～原の地名が続く所は砂鉄がよく採れたところである。



和気清麿『松木の陶像』

又、吉井川上流の美作地方からは鉄鉱石が採集され、舟で千駄、奥吉原の猿喰池製鉄遺跡へ運ばれている。その他、木材、農産物などの豊富な資源も運ばれる吉井川は、古代から物流、及び、人々の交通の重要な幹線として和気氏一族の勢力下にあったと考えられる。造船や川港の護岸工事、大水による川底、川筋の改修など、高度な技術力と多くの人夫を動員する実力もあつたに違いない。高瀬舟と呼ばれている吉井川の構造舟は、相当古く古墳時代にはあつたらしく、上流の美咲町大平山の月輪古墳から、丸木舟では無い構造舟の埴輪が出土している。和気一族も使ったであろう運搬舟を上流に上げるには、20 人程が綱で引いて川を遡るためには、船頭道、川底、川岸の整備が常に必要であつた。

和気氏は河川の整備はもとより、赤磐市内の古代の官道、寺院等の國造りに深く関わつたと考えられる。又、霊峰熊山に残る石積遺跡も信仰の聖地づくりとして、和気氏が関わっていたとされている。

そして、吉井川が良く見渡せる千駄猿喰地区にある 5 世紀頃の前方後円墳・武宮古墳に初代の和気氏を葬り、前方 10m 位下に 9 世紀頃造られた和気一族 21 人を祭った武宮宿禰神社(タケミヤのスクネ神社)ある。

西暦 4 世紀後半から 7 世紀後半迄、約 300 年間に和気氏が何代続いたかは解らないが、武宮古墳から南約 200m に明神山古墳群が、100m 先へ明神山遺跡、200m 西に矢部古墳群がある。

また、武宮古墳から 100m 東に大谷山古墳があるが、墳上には石室が二つ並んで設けられており、地元では清麿と広虫の墓室と云われている。そして、南 100m 上の大谷山頂上にも古墳とされている所があり、清麿の父が葬られているとも言われている。古墳から吉井川の東を見ると和気の宿場町が見え、西を見ると下流の万富地区が、良く望む事が出来る重要な場所である。

(出宮会長)

仏教と同じく、いろいろな教えが外来の宗教として日本に入ってきた。ヒンドゥー教の唯物的、しかも象徴的偶像として、熊山の石積遺跡から出土した筒型容器が祀られたとされている。しかし日本古来の神道の新嘗祭でも男女を形どつたお供え物がある。赤磐市の高倉神社の磐倉にも男女を形どつた大根が供えられている。豊作と子孫繁栄の偶像として日本の社会にも受け入れられてきたが、学術的には受容されていない。大陸から朝鮮半島などを経由して稲作などの先進文化を持って入ってきた渡来人のエネルギーやヒンドゥー教のエネルギーが日本社会に、どう昇華されてきたのか。



武宮古墳中段にある武宮神社

仏教が中東、そして中国から日本に伝わるうちに変形したのかもしれない。面白いユニークな話ではあるが、説明するには新しいデータを収集して欲しい。

吉備の新興勢力の和気氏は、空海と密接な関係にあったとされているが、空海と密教の繋がり、熊山遺跡と鑑真、そして安如宝など、これからも物証的に明らかにしてはどうか。

(このシンポジウムの要約はパネリストから頂いた資料をもとに編集しました。責編集者)

土佐一ノ宮「土佐神社」(しなね様) 参拝

会員 青木 毅

平成 26 年 3 月 26 日、神社庁和気・備前支部は、氏子総代会和気・備前支部と合同で高知市の“土佐一ノ宮「土佐神社」(しなね様)”に正式参拝しました。

岡山県神社庁支部再編に伴い、当支部は「赤磐支部」と合流し、「東備支部」として昨年から活動を開始している。そこで今までの和気・備前支部としては、今回が最後の行事となりました。

当日は、和気町の由加神社からの出発で、バス 1 台を貸し切った日帰り旅でした。土佐神社のほかに、高知大神宮の参拝、桂浜散策などをして帰りました。

土佐神社は、旧国幣社(キュウコクヘイシャ)中社で、祭神については土佐大神あるいは、土佐の国造りに任ぜられた大和の賀茂氏と関係の深い味鋸高彦根神(アジスキタカヒコネノカミ)、一言主神(ヒトコトヌシノカミ)といわれている。



写真 - 1

《旧国幣社…旧社格の一つで官幣社に次ぐもの。もと国司から幣帛(ヘイハク=神に奉獻するもの)を奉った神社で、明治以降は国庫から奉った。大社・中社・小社の三等があり、主に国土経営に功績のあった神を祭る。第二次大戦後廃止された。国社。》

味鋸高彦根神は、大国主神の御子であり、国土の開拓、農工商あらゆる産業の繁栄の神様であることが伝えられ、一言主神は、和合協議の神として一言で物事が解決



写真 - 2



写真 - 3

されるという特殊な信仰のある神様とされている。これにより当社は、古くより南海の総鎮守として家内安全、農産繁栄、建設、政治などの神様とされ、更に航海安全、交通安全、病氣平癒の神様と称えられるなど、開運招福の神徳があるとして崇敬されている。

土佐神社の創祀については、明らかではないが、境内東北方の礫石（ツブテイシ）【写真—6】と呼ばれている自然石を磐座として祭祀したものと考えられている。平安時代、醍醐天皇の御代には式内大社に列せられ特に皇室の崇敬もあつく、勅使（チョクシ＝天皇の意思を伝達するために派遣れる特使）の参向もしばしばあったという。室町時代には、武門の崇敬あつく、元龜元（1570）年、長曾我部元親（チョウソカベモトチカ）が、本殿、幣殿、拝殿を再興している。

《長曾我部元親…1539～1599。土佐の大名。一条家を追放して土佐一国を支配、のち四国全体を統一したが、豊臣秀吉に降伏、土佐一国の領有を許される。》

元親公が建立の現社殿の本殿、幣殿、拝殿は、国指定重要文化財である。入母屋造りの前面に向拝を付けた本殿と、その前方の十字形をなす幣殿、拝殿、左右の翼、拝の出から構成されている。【写真—1】



写真-4

十字形の屋根は交差した部分が重層切妻であり、他は単層切妻である。幣殿を頭とし、尾に相当する拝の出を長くした十字形で、本殿に向かって“とんぼ”が飛び込む形に見立てた入蜻蛉形式（イリトンボケイシキ）で、凱旋を報告する社という意味があると言われている。

《若宮八幡宮…高知市長浜にあり、現在高知市南部の総鎮守となっているが、元親公による出蜻蛉（デトンボ）の社殿が築かれている。ここに陣をはり戦に勝利したことから、戦勝を祈願するようになり、土佐神社の入蜻蛉と対をなしている。》

“とんぼ”の頭に相当する幣殿の内部が素晴らしい。【写真—2, 3】天井は「格天井」、中央に“龍”の絵が描かれ、周囲の下がり壁に“三十六歌仙”の絵が嵌め込まれている。そして本殿の向拝を支える柱に、魚の彫り物が「あ」「うん」の形で嵌められているのが非常に珍しい。

【写真—4】

境内後方社殿を取り巻くように“しなねの森”と名付けた散策コースが整備されている。宮司さんが案内してくれた。【写真—5】

事代主神社、西御前神社、大国主神社、角竹の竹林、神木の杉、つぶて石、輪抜祓所、みそぎ岩、

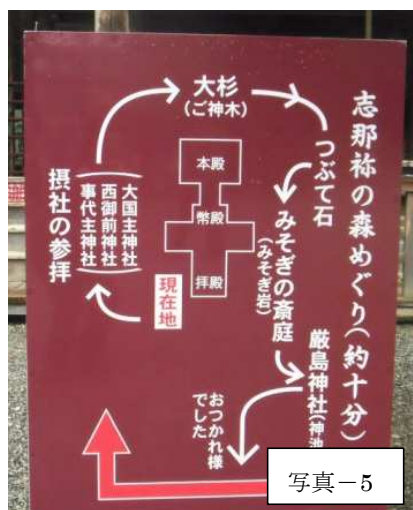


写真-5

巖島神社、鼓楼（重文）と巡った。

“しなね”の語源は、7月は台風吹き荒ぶことから風の神「志那都比古」から発したという説、また新稲がつづまったという説もあるとのこと。

風雨にさらされた太い柱と、ガッシリとした風格のある社殿に、神々しいものを感じながら神社を後にした。（終り）



写真-6

☆平成 26 年 5 月 24 日開催のシンポジウムで横山修尚氏は「熊山遺跡と鑑真和上とヴァン仏教遺跡」「突厥系ソグド人である安如宝とヴァン仏教遺跡」などを紹介されましたが、丸谷憲二さんから、「岡山県内でのソグド人の業績発表は始めて」として下記の論文を寄稿いただきました。

熊山遺跡とヴァン仏教遺跡

会員 丸谷憲二

はじめに

中央アジアのタジキスタン共和国にヴァン仏教遺跡がある。タジキスタンは、シルクロードの国際商人として栄えたイラン系民族・ソグド人の本拠地（ソグディアナ）である。西方の諸宗教を東方へ伝来する中継地でもある。仏教のインドから中国への伝来もタジキスタンを經由している。

1 タジキスタン共和国

1990 年代に内戦があった。国土の 90%は山岳地帯であり 6,000～7,000m の山々が連なる「世界の屋根」パミール高原を有する国である。北部にはフェルガナ盆地にイスタラフシャン等の古都があり、東部には国土の 45%を占めるゴルノ・バダフシャン自治州がある。1998 年 7 月、秋野豊(国際政治学者、筑波大学助教授)国連タジキスタン監視団 (UNMOT) 政務官を含む 4 人の UNMOT 要員が、首都ドゥシャンベ東方の町ラビジャール近くで殉職した。秋野豊氏は、日本政府が国連の要請に基づき、1998 年 4 月よりタジキスタンに派遣されていた。



2 帝釈山靈山寺創建と安如宝

熊山遺跡の隣に天平勝宝(749～757 年)年間に鑑真和尚(688～763 年)の開基伝承を持つ帝釈山靈山寺があった。鑑真に随行して渡来した弟子に中央アジアの出身者がいる。「安如宝」である。「安」とは昭武九姓の一つで、「安国」(ブハラ)の出身者である。ブハラはソグディアナの一大都城である。安如宝はソグド人である。安如宝は建築に造詣が深く、唐招提寺の伽藍造営に多大な功績があった。熊山遺跡とは、ソグディアナに幾つも建っていた石積みの仏塔を安如宝が日本で再現したものと推定される。

3 唐招提寺と安如宝

鑑真の唐招提寺は講堂と僧坊を持つだけの律宗の学問寺であった。鑑真と共に渡来した安如宝が鑑真の意思を継いで伽藍を建てた。如宝は中国人ではなく胡国人であった。つまり西域出身のソグド人である。彼の出身地はブハラで、現在のウズベキスタンである。

ソグド人は中央アジアのシルクロードの拠点に住み東西貿易によって栄えた。宗教的に寛容であり、いろいろな宗教を信じる人達がいた。仏教徒も多数いた。西域はアレキザンダー大王に占領され、ギリシャ文化が入ってきた。如宝はギリシャ建築も知っていたのであろう。金堂の正面の柱の数は 8 本あり、アテネのパンテオン神殿と同じである。奈良はシルクロードの終着点である。

4 安如宝

安如宝(安如保・如保・731～815 年)は奈良・平安前期の律宗の渡来僧である。中央アジアのサマルカンド地方の安国の出身である。鑑真に師事し天平勝宝 6 年(754 年)正月に来日した。774 年に東大寺戒壇院戒和上となっている。一時下野薬師寺(栃木県下野市)に住した。鑑真が没し委嘱により唐招提寺に帰

住し、第4代住職となり伽藍造営と律宗の高揚に尽力した。

ソグディアナは現在の中央アジア・ウズベキスタンとタジキスタンとの国境地域にあった。ソグド人たちは交易の民として、西域からトルファン、敦煌周辺に聚落をつくり、西安にまで進出していた。「楊貴妃のお気に入り」安祿山はソグド人軍閥の領袖であったが「安史の乱」を起し、揚州ではソグド人8万人が虐殺された。その生き残りが安如宝である。

5 ソグド文字と法隆寺

法隆寺献納宝物の香木白檀2点に焼印文字が、1986年に東野治之氏と吉田豊氏（神戸市立外国語大学）によりソグド文字のニーム・スィールと解読された。法隆寺は607年建立であり、法隆寺と突厥国との交流記録である。ソグド語は中央アジアにおける交易言語である。中国人商人とイラン人商人との間の共通語でもあった。

ソグド文字からウイグル文字が派生し、ウイグル文字は後にモンゴル文字の元となった。

6 ヴァン仏教遺跡

Tajikistan: Vrang Buddhist stupa

安如宝の生誕地タジキスタン共和国のヴァン仏教遺跡は日本では知られていない。熊山遺跡と最も似ている遺跡である。仏教僧院と石窟の遺跡が残る村の丘の上に基壇が残されている。住居跡や裏山には城砦跡もあり古くから栄えていた。ヴァン仏教遺跡の背後に広がるのがパンジ川とワハーン溪谷である。



7 皮革様固形物の重要性

仙田実氏は「奈良三袖小壺と皮革様固形物は盗掘のさいに同時に取り出された。皮革様固形物は、所にも実態も性格づけも、まったくはっきりしない。」としている。

ヴァン仏教遺跡の写真から、皮革様固形物は「騎馬民族の必需品である羊の胃袋を干して作った皮の水筒」と推定される。突厥国からの渡来者を証明する最も重要な遺物が行方不明になっている。

8 まとめ

熊山遺跡、霊山寺、安如宝、中央アジア・タジキスタンのヴァン仏教遺跡がつながった。イリ川は、新疆ウイグル自治区北部のイリ・カザフ自治州からカザフスタン南西部のアルマトイ州にかけて流れる川である。天山山脈に源を發し、西に流れバルハシ湖に注ぐ。流域のイリ地方では烏孫、チャガタイ・ハン国、ジュンガルといった遊牧国家が興亡した。イリ地方から渡来した突厥系ソグド人が熊山遺跡を建築し、熊山から流れる川を見て、故郷のイリ川を思い伊里川と命名した。

10 参考文献

- ① 『熊山遺跡・日本・謎の石造遺物紀行 4 岡山編「熊山遺跡」』http://www.geocities.jp/gur_bahram/msrj/msrj04.htm
- ② 西遊旅行社 http://www.saiyu.co.jp/special/central_asia/midokoro/tajikistan/index.htm
- ③ 『ヴァン仏教遺跡』 <http://www.traveladventures.org/continents/asia/vrang-buddhist-stupa06.html>
- ④ 『元亨釈書』 卷第十三 『新訂増補 国史大系第三十一卷』 昭和40年 吉川弘文館
- ⑤ 『吉備国の語源「黄蘗」と羈縻（きび）政策「熊山遺跡出土品」の考察』 丸谷憲二 平成22年4月17日
- ⑥ 『キルギス共和国と日本』 丸谷憲二 平成23年8月13日

厚⑦『唐招提寺』 http://www.geocities.jp/general_sasaki/nara-toshodaiji-ni.html

⑧『シルクロードの光と影 日本とシルクロード(5) 唐招提寺の住職はソグド人だった』

<http://silkroad-j.lomo.jp/nittyu/nittyu23.htm>

⑨『シルクロードの民族音楽の興亡』 <http://uruseiyatsura.blog62.fc2.com/blog-entry-118.html>

東備地区の土偶(オドクウサマ)信仰について

このたびのシンポジウムで佐藤理事は、熊山石積遺跡から出土した筒型陶器はヒンドゥー教のシヴァ神の精力(エネルギー)の象徴でもある「リング」(男根)であると考えている。熊山の南麓では、今でも男根が神棚に供奉されている家があり、ヒンドゥー教のガネーシャが起源とされる歓喜天が祀られているお堂もあると話されました。

また、出宮会長は日本古来の神道でも子孫繁栄、農作物の豊穰を祈願して金精様などの信仰が行われてきた……などのお話がありました。

岡山県史、長船町史、瀬戸町誌などの郷土史を調べて見ると、「東備地区の備前焼の陽物を神棚に供える風習」「備前市畠田の歓喜天信仰」「吉井川右岸の三谷の金剛童子や瀬戸町の鍛冶屋で女陰や男根が祀られていた」などと記録されていますが、私が少年時代に通った中学は、戦後、熊山の南麓、吉井川の備前大橋の東詰めに新設された熊南中学(現在は長船中学)でしたので、同窓会などで友達に尋ねて見たことがあります。

私が友人に見せて貰ったのは男根の形をした備前焼ですが、いずれもオドクウサマ(オドックサマ)さまと呼ばれている土間の竈の神棚に供奉されていました。また、戦後に家を建て替えたときに庭の隅に埋めた。昔はどの家にもあった……などという話も聞きました。

備前市畠田のある友人の話では、子供の頃に高熱を出したときに、母親が神棚に供えた備前焼のまわりを、籠に入れた豆か、なにかをお供えしながら、お百度参りをしていたそうです。また、昔は炭屋やタバコ屋をしていたという瀬戸内市福岡の友人は、今でもお正月にはオドクウサマにお供えした備前焼を磨いていました。オドクウサマを祭るのは男の役だそうです。

また、2011年にNHKラジオ第2で放送された森本達雄のテキストには、写真入りで「インドでも豊穰多産を祈願し、人びとはリングを形どった像に花々や供物をささげる。街角にもリングの像が見られる。私たち日本人は、遠く父祖の代から、知らず知らずのうちに、日常の暮らしや習慣、思考方法などにヒンドゥー教から少なからぬ影響を受けてきている」としていましたが、私は今でも、お正月の1月5日の縁日には賑わっている、和気町吉永の牛神様の備前焼の牛と同じように、熊山権現か、三谷の金剛童子などにお参りしたときに、子孫繁栄や豊穰を願って備前焼を買って帰り、オドクウサマにお供えしたのではないかと考えていますが、なぜ座敷の神棚ではなく、台所の神様にお供えするのか？オドクウ様は女の神様であるから？江戸時代の昔から、夏から秋にかけて三重県の桑名から、香登や閑谷を起点として、草ケ部などの東備地域を巡業している、国重要無形文化財の伊勢大神楽とオドクウサマのお話は、また別の機会に。(中西 厚)

専門部会・探索部活動報告

H26. 1. 25(土) am10:00～ 集合場所・JR 熊山駅駐ち車場 (探索場所) 赤磐市千躰行人山石積遺跡
明人山石積遺跡

- (参加者) 岡野、山形、林、津曲、伊永、松原、向井、大河内 8名
 H26. 2. 22(土) am10:00～ 集合場所・シシガ谷廃寺跡駐車場 (探索場所) 御堂屋敷付近の大炭窯群跡谷
- (参加者) 山形、片山、津曲、伊永、安達、大河内 6名
 H26. 3. 22(土) am10:00～ 集合場所・シシガ谷廃寺跡駐車場 (探索場所) 黒岩から烏泊山コース炭焼窯跡 備前焼窯跡
- (参加者) 岡野、山形、片山、津曲、伊永、長安、安達、大河内 8名
 H26. 4. 26(土) am10:00～ 集合場所 熊山山頂駐車場 (探索場所) 南山崖付近
- (参加者) 岡野、山形、片山、津曲、伊永、長安、松原、大河内 8名

探索部例会報告 2014.3.22 10:00~2:00

場所 登山道和気論山コースの黒岩から烏泊山付近

(参加者) 岡野 山形 片山 伊永 津曲 長安 安達 大河内 計8名

獅ガ谷廃寺跡から北西に和気論山に向かう登山道を約1.2kmを行くと、黒岩と呼ばれる巨岩に出会う。標高約400mの南斜面にそそり立っている大岩で、上に立つと、片上湾及び瀬戸内海が見渡せる。黒岩と言う名称は何らかの特別な意味を持つ呼称のようで興味深い。そこから少し道を下った道脇に内径約8m×7.5mの大炭窯跡がある。



黒岩から南片上湾を望む



大備前焼窯跡の谷



谷底の大量の窯壁と陶片

このあたりは備前市と赤磐市、和気郡に股がる三つの境上に山道が造られており、南斜面の備前市側の谷下には備前焼の古窯跡がひしめいているのが遺跡地図から判る。前回このコースを下見に来た折、道脇の谷を上がった所に大きな備前焼窯跡を発見したので、皆で確認に行く。

かなり大きな窯跡の谷で、上部は無いが両サイドの窯壁が残存している窯遺構もあり、自然崩壊と盗掘崩壊が重なっていると思われるが、谷の両サイドには作業場？道等の整地跡などが、また、谷底部には窯壁、灰原陶片遺物が約20m以上にわたって大量に埋まっている様子が確認される。この遺跡は、後日、赤磐市教育委員会文化財課に届けて、位置を確認して頂いた。

私達はこの窯跡の谷を上に登り山尾根にでて、西に古い尾根道を辿ると、南斜面下方に巨岩が約15m連なって



奥吉原剣抜峠にある大炭焼窯跡

いる場所があり、祭祀か修験場として使われた可能性がないか、確認しながら降りて行くと、和気論山コース登山道に出た。

そこから、烏泊山へ約 50m 登る。この辺りは山の尾根道が版築工法で造られており、また、奥吉原の剣抜峠に降りる道の脇には内径約 7.5×6.5 の大炭窯跡がある。年代は判らないが昔人の活動の痕跡としての遺構が残っている。この日は快晴だったせいか、烏泊山頂上部からは、大山が遥か彼方に望めた。

その後、帰路に着くが、備前市と赤磐市の本来の境界上と思われる、昔の山尾根道を西南に戻って、黒岩北の標高約 420m の舌状頂上部に出る、ここで、地図と磁石で現在地を確かめ、南に下ると私達が通った登山道に出る筈が、何故か西に下ってしまい、思わぬ方向の万願寺剣抜峠コース登山道に出てしまった。一同、狐に化かされたのではと思い、苦笑しました。

<編集後記>

☆残念ですが、25年度をもって、清水紀子事務局長が退任、退会されました。2年前、急逝された金光事務局長より後任を託され、引き継いでくださいました。以来、2年間、優秀な頼りがいのある事務局長として、会をリードして下さり大変お世話になりました。本当に有り難うございました。

事務局後任は、特別事務局担当として、中西理事、大河内理事らが共同で運営にあたります。到らない私達ですが、会員の皆様のサポート宜しくお願い致します。

そして、力強い事に今期から、新理事として、津曲真人氏、伊永正道氏(会計担当)が会運営に参加して下さいました。

尚、25年度末迄に6人の新入会員の方々がありましたが、会員は年々減少気味です。入会者拡大のご協力と、今年度会費未納の方は、入金を宜しくお願い致します。(大河内)

☆この度 理事に推挙されました長船在住の津曲です。自宅からいつも見ていた熊山に興味を持ち、この会に参加するようになり5年になります。専門部会で皆さんとご一緒したり、一人で登ったり、年に30回くらい登っています。興味が尽きない熊山の魅力を多くの方にお伝えしてゆきたいと思えます。今後とも宜しくお願い致します。(津曲)

☆この度、当会の会計担当理事に選出されました伊永です。私は学生のときから歴史好き人間で、熊山の地元出身者ということもあり、熊山にも非常に興味を持っています。これからも出来る限り熊山に登り、生の熊山の現場を発信して行ければと思います。宜しく申し上げます。(伊永)

☆会報はページ数に制約があり、経費節減のためモノクロで印刷しましたが、ホームページでは、皆様の日頃の活躍や写真など、フルカラーでタイムリーに掲載しています。「ご意見」「考え」「思い」「写真」など、なんでも結構です。皆様からのご投稿をお待ちしています。(中西)

(事務局・投稿先)

岡山市東区草ヶ部 196 中西 厚 (〒706-0635 ☎086-297-5887 e-mail nakanishi@kne.biglobe.ne.jp)

瀬戸内市長船町福岡 834-1 大河内栄子 ☎0869-26-3155 e-mail ekoba-1@email.plala.or.jp

熊山遺跡群調査・研究会のホームページ：熊山遺跡研トップ